

Computer Report

Vol. 55 No. 10 10月号 (通巻 733号)

はじめの言葉

■安全保障法案が参議院でも可決された。国会での議論がどこまで尽くされるべきかは常に問われるテーゼである。確かに全国民の理解が得られる国会議論の実現は、かなり高いハードルである。現実的には議会制民主主義の原理をとっている限りにおいて、議会の多数決の結果をもって最終結論とする。今回もその結果である。問題は、今現在の議会多数が、本法案を担保に政権与党が勝ち得たものでないことである。

■もちろん、いちいちの法案毎に選挙をするわけにはいかないことは承知している。また、政治と国会勢力の関係には、時の流れというものがあるし、具体的な法案提起をしなくても、どの政党がどういう政策方針／党是を持っているか、選挙民の暗黙了解があると言える。しかし、独断的憲法解釈をし、もって立憲主義を犯してまでの多数決決議は、とても先進国の国会運営とは言い難い。横暴が過ぎる。これは別の大問題である。

■国是としての国家防衛論は、確かにあって然るべきである。近隣国の中に、70年前に破綻している時代錯誤な覇権帝国主義を今も持ち、現在進行形で周辺諸国を侵略している一方、かつその侵略地域を拡大しようとしている動きがあることも事実である。そこに、一切の軍備を保有しない絶対平和主義が通用しないのではないかと不安に駆られている国民もあることだろう。今回の安保法案成立に賛成する立場／根拠のひとつと言えよう。

■人間が自己防衛／防御感覚を持っていることは、自然な常態である。国家レベルでもそうだし、個人レベルでも必要な感覚（センス）である。この自然な自己防衛感覚について別の観点で改めて思い知らされたのは、先の大雨による河川決壊での犠牲者（死者）の発生であった。当該地域（市）の避難指示の出し方に問題があったかという疑念を報道するむきもあったが、当該地域の住民自身の避難行動にも問題があったように思える。

■観測史上経験のない気象現象の中、栃木県、茨城県には気象庁から特別警報が出され、直ちに命を守る行動をとるようという呼びかけがあった。にもかかわらず、今にも河川の越水状況の地域にありながら避難行動を起こしていなかったことは、どう総括しておくべきだろうか。事ある毎に、自治体などに責任を求める傾向が強い昨今だが、市民の自己責任のあり方自体も見直しておく必要があるように思える。

■別件だが、埼玉県では6人の連続殺人という、おぞましい事件が発生した。地元警察は事件の直前、容疑者と思われる男の身柄を確保していたが、タバコを吸いたいという容疑者の願いを叶えるために与えた、ちょっとしたスキから逃亡を許したという。警察のリスク感覚のお粗末さ、リスク管理の甘さに呆れはてる。どういう理由からの身柄確保だったか分からぬが、窮地に陥った人間の殺傷能力の恐さを、改めて確認させられた。

■国家レベルの脅威回避、自治体レベルのリスク予防、個人レベルで生命防衛のあり方、捉え方を考えさせられる。アメリカにおける各国首脳会談でも協議の対象になったサイバーテロという脅威も深刻度を増している。SNSで自己顕示欲を示す性的／性格異常者による殺傷事件も目立つ。利便性が高まる情報社会にあって、我々を取り巻く環境のリスク／脅威も、複合複雑化そして高度化してきていることを痛感する。（藤見）